ドイツの名門「アンドレス・オロスコ＝エストラーダ率いるフランクフルト放送交響楽団」と水晶のごとき輝きを放つ新星「ダニエル・ロザコヴィッチ」が放つ火花！の公演を紹介します。

アンドレス・オロスコ＝エストラーダ
(c)Martin Sigmund

［伝統あるフランクフルト放送交響楽団は、いまアンドレス・オロスコ＝エストラーダと新たな時代を迎え、若きソリスト、ダニエル・ロザコヴィッチとの熱き音の対話を披露する］

フランクフルト放送交響楽団は１９２９年創立の歴史と伝統を誇るオーケストラ。豊かにうたう弦楽器とダイナミックな管楽器の響きを特徴とし、これまで名指揮者のもとで数多くの名演を生み出してきた。

２０１４年、このオーケストラに新たな風を吹き込むべく、コロンビア出身のアンドレス・オロスコ＝エストラーダが首席指揮者として就任。オーケストラは新時代を築くことになる。

オロスコ＝エストラーダはウィーンで学んだ、いまもっとも勢いのある指揮者のひとりで、２０１７年にはベルリン・フィルにデビューを果たしている。情熱的でオーケストラを自在に鳴らし、カリスマ性も備えている彼は、ドヴォルザークを得意とし、今回は交響曲第９番「新世界より」で真価を発揮する。「新世界より」は、アメリカに渡ったドヴォルザークが、「アメリカ大陸から故郷の人たちに送る印象記」として書いた作品。第２楽章の美しいラルゴは、「家路」として知られている。

オープニングのワーグナーの「リエンツィ」序曲は、おだやかで流麗な前半と華やかな行進曲風の後半のコントラストが聴きどころ。さらにメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲は、ベートーヴェン、ブラームスの曲と並んで「３大協奏曲」と称される傑作である。全編がロマンティックな曲想に彩られ、幸せ色と憂愁さの両面が混在して聴き手の胸を打つ。

ソリストを務めるダニエル・ロザコヴィッチは、２００１年ストックホルム生まれ。７つの民族の血を受け継ぎ、語学も堪能。子どものころからチェスが得意で、プロを目指したこともあるとか。すでに著名な指揮者、欧米各地のオーケストラとの共演を重ねる実力派で、演奏のたびに大きく飛躍していく。ごく幼いころに「ヴァイオリニストになる」と自分で決め、その道をひたすら邁進。みずみずしく流麗で躍動感あふれるメンデルスゾーンが期待できそうだ。指揮者、オーケストラとの密度濃い音の対話にも注目したい。

（音楽ジャーナリスト　伊熊よし子）

ダニエル・ロザコヴィッチ
(c)Sergey Andreev

フランクフルト放送交響楽団コンサート

深みある響きとみなぎる鮮烈な音楽表現能力　若き才能との注目の響演！

日　　時：６月８日(金)　午後６時４５分 開演
場　　所：太田市民会館
チケット：Ｓ席/12,000 円　Ａ席/11,000 円
　　Ｂ席/10,000 円　Ｃ席/ 9,000 円
プレイガイド：太田市民会館
　　昌賢学園まえばしホール（前橋市民文化会館）
　　ｅ＋(イープラス)http://eplus.jp
問い合わせ：太田市民会館（群馬県太田市飯塚町 200-1　℡：0276-57-8577）

予定曲：ワーグナー
　歌劇「リエンツィ」序曲
メンデルスゾーン
　ヴァイオリン協奏曲　ホ短調　OP.64
ドヴォルザーク
　交響曲第９番　ホ短調　OP.95「新世界より」